

ふつうって何だろう？

葛飾小学校 三年 山田 真央

書名「ふみきり・ペンギン」

著者「おくはらゆめ」

「ゆうとつて、左手でえんぴつ持つてるのへんじやない？」

私はこの言葉を読んで、「右手がふつうってこと？そもそもふつうって何だろう。」と思いました。私は、えんぴつを持つのもおはしを持つのもボールを投げるのも全て右手です。だから私は、ふつうだということなのでしょうか。

この本に出てくるゆうとは、左利きです。左利きのことを「へン」と言わることを、「ふつうどちがうだけで、からかつてくる友だちがふえた。」という理由で学校がつまらないと感じてしまいます。でも、ペンギンやかい犬のマルは「みんなどちがつて、なんかかっこいい」や「左ききでも右ききでもどっちでもいい」と言つてくれました。

私は、自分にとつての「ふつう」はあるけれど、

みんなが同じ思いで使う「ふつう」はないと思います。たとえば、私の家では夕飯を食べた後におふろに入りますが、おふろに入った後に夕飯を食べる家もあります。また米を主食としている家があれば、パンを主食としている家もあります。このように、自分の中の「ふつう」は国によつてもちがうし、その家に住む人によつてちがうものです。その中に自然に「ふつう」というきじゅんをもちます。でもこの「ふつう」はみんなに通じるわけではないので考え方をおしつけてはいけません。

ゆうとの「左利き」は、そのクラスの中や学校の中、世の中全体で、右利きの方が多いことを考えると少ない方に入ってしまいます。でも「少数派」なだけで「ふつうではない」わけではないのだと思します。

この「ふつう」という言葉は、ゆうとをきずつけてしまつたようにだれかをきずつけてしまうきけんのある言葉です。自分の体に不自由なところがつたり、学習が苦手だつたりする人もいますがそれ

を「ふつうではない」と考えてしまった場合はその人をひていいしていることになるからです。私の弟は成長がゆっくりなので、同じ四才の子の中ではお話が上手にできない「少數派」です。でも「まおちやんの弟はふつうじやないね。」と言われるときがあります。ふだんは何も気にしていないけれど、三さいじけんしんなど他とくらべなければいけないときにお母さんも

「ふつうって何だろうね。お母さんにとって、ふつうの子だけどね。」
と言つてます。

このように「ふつう」はむずかしい言葉だからこそ、いつでもどこでも使うのではなく相手のことをよく考えて使つていいくことが大切だと思います。

「ふつう」という言葉で自分がだれかをきずつけることがないように、そして「ふつう」でいたいと思はずぎないよう一人一人が気をつけていけば「ふつう」でなやむ人もいなくなるのではないでしょうか。一人一人がちがつてているからこそかがやける、

そんな世の中を生きていきたいです。

（原文ママ）